

指示代名詞「それ」の文脈指示における照応規則について

鯨 井 綾 希

キーワード: 指示代名詞「それ」、文脈指示、照応、代入規則、維持規則

要旨

本稿では、名詞句を指し示す文脈指示の「それ」が先行詞を特定するまでのプロセスを明らかにすることを目的とし、その照応プロセスを制御する諸規則を記述した。分析の結果、「それ」に先行詞を特定するための三つの代入規則と、先行詞の代入を維持・変更するに際した二つの維持規則を明らかにした。また、代入規則と維持規則の衝突による先行詞選定の際の曖昧性も指摘した。

1. はじめに

指示代名詞は先行文脈の一部を指し示し、それが具体的な値として代入されて初めて意味を持つ点で、一般的な名詞と異なる。一般的な名詞を、それ自体で何らかの意味を持つ定数として扱うならば、指示代名詞は何らかの値を代入する変数であると言える。したがって、あるテキストの意味を正確に把握していくためには、その中で随時表現される指示代名詞に具体的な値が代入されなければならない。また、その際に代入される先行文脈中の表現たる先行詞は、アドホックに決定されるわけではなく、何らかの規則に従って特定されていると考えられる。そうでなければ、テキストの表現者が用いた指示代名詞を、テキストの受容者が適切に復元することができないからである。

そこで本稿では、文脈指示用法としての指示代名詞の中でも、特に先行文脈内で明示された名詞句を先行詞として取る場合の「それ」の用法に注目し、「それ」に先行詞が代入されるまでの照応プロセスに課される諸規則の記述を試みる。

2. 先行研究

指示語の研究は、佐久間(1936)を始めとして、従来コソアの使い分けと体系化に重点が置かれて研究されているが(金水・田窪1992、田窪2010など)、近年では、特にテキスト中で先行する情報を指し示す文脈指示用法に注目し、指示語が文脈中で指し

示す対象や、その指し方の性質を取り上げる研究が見られる(庵1995、竹田2000、東郷2000、堤2001、堤2002、庵2007など)。そうした観点からの研究の場合、指示語の性質から考えて、その基本的な役割である先行詞の特定の方法を、言語的特徴を通して把握していかなければならない。しかし、そこでもコソアの差や「その」と「それ」の違いといった体系内部における差異の明確化、及びそれらと心的領域の関連性などが論の中心であり、テキスト中の言語的特徴によって指示語の先行詞が特定されるという観点に基づく照応プロセスについては、未だ課題として明確に提示されていないように思われる。よって本稿では、テキスト中における指示語が、どのようなプロセスを経て先行詞を決定するに至るのかという問題の解決を目的として、そのプロセスを制御する諸規則を明らかにする。

3. 分析

3-1. 「それ」に先行詞が代入されるための規則について

3-1-1. 先行詞の代入に伴う基本的な規則

まず、最も単純な規則として、「それ」によって表される文の意味が、「それ」の先行詞となる名詞句が引き継いでいる意味と矛盾しないという点を挙げることができる。意味の引き継ぎとは、長田(1984)で「持ち込み」、庵(2007)で「テキストの意味」と表現されるものである。先行詞となる名詞句からの意味の引き継ぎは、具体的には次のような用例で見取ることができる。

- (1) 若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に、金屏風を建てたように見える。それを見ると私は、金閣を想像した。 (長田1984の用例)

長田(1984)では、(1)の用例において波線部「それ」が下線部「若葉の山腹」を指すとした上で、内容の「持ち込み」が行われて、実質的には「野の只中に西日を受けて金屏風を建てたように見える」若葉の山腹」となると指摘した。

こうした機能は、次に示す(2)のように指示代名詞における先行詞の代入を制限するものとしても働いている。

- (2) 人の欲望に限りはない。よって購買意欲も無限に存在する。しかしながら、#それ¹は有限である。 (作例)

(2)の下線部に示した「それ」の指示先は不明である。先行詞の候補としては「欲望」や「購買意欲」があるが、それらは限りないもの、無限であるものという意味が引き継がれているため、「有限である」とことと意味的に矛盾し、「それ」の先行詞として代入で

きない。この結果から、「それ」に先行詞を代入するに際しては、以下のような規則が課されると考えることができる。

(a)「それ」によって表現される文の意味と矛盾しない情報が付与された名詞句を代入せよ

そもそも意味的な矛盾は、有意味な連文を構成する上で引き起こしてはならない原則と言えるため、この規則は実際の文脈中で「それ」を使用する上で最も基本的なものであると考えられる。

3-1-2. 先行詞の候補数に関わる規則

「それ」の先行詞を確定するに際しては、その候補の数も問題となる。たとえば、先行詞の候補が一つである場合、先行詞は明確に定まる。

(3) 画期的なイノベーションが登場しても、それがすぐに浸透するわけではない。(米倉誠一郎2003『企業家の条件－イノベーション創出のための必修講義－』ダイヤモンド社)

(3)では、「それ」が指せる名詞が「イノベーション」の一語しかないことから、「それ」が指すものもその一語しかありえない。したがって、これを以下のような規則として記述する。

(b) 先行詞の候補が一つであれば、その名詞句を代入せよ

他方、名詞句が二つ以上登場するときは、「それ」は複数の名詞句を同時に指すことができず、何らかの条件によりそこから一つが選定されなければならない²。

(4) テーブルの上には、オレンジとスイカとニンジンが並んでいた。私は大喜びで#それを手に取り、一口かじってみた。(作例)

(4)の連文では、「それ」の先行詞が「オレンジ」なのか「スイカ」なのか「ニンジン」なのか特定できない。また、「オレンジ」と「スイカ」と「ニンジン」の全てを別個に指すとも言えない。

一方、次のようなケースでは、「それ」の先行詞となる一語を明確に把握できる。

(5) くし型に切られたオレンジが鮮やかな汁をしたたらせ、ガラスのお皿に盛ってある。私がそれを食べているあいだに、睦月は部屋の温度が一定になるようにエアコンをセットし、一日のBGMを選んてくれるのだ。

(江國香織1994『きらきらひかる』新潮社)

(5)の波線部によって示した「それ」は、先行詞としては明らかに「オレンジ」を指し

ている。(4)と異なり、(5)が「それ」に適切な先行詞を代入できるのは、その後の動詞が「食べる」であることに起因する。その証拠に、次のような連文では、点線部「割る」という動詞の目的語として取り得るものから、「それ」の先行詞は、「オレンジ」ではなく「お皿」になる。

- (6) くし型に切られたオレンジが鮮やかな汁をしたたらせ、ガラスのお皿に盛ってある。私がそれを割ってしまったのは、私の落ち着きの無さがなせるわざかもしれない。 (用例5の改変)

つまり、先行詞の候補が複数ある場合、「それ」に係る動詞によって、先行詞が一つに定まることがあるということが分かる。言い換えれば、動詞が、「それ」の曖昧性を解消するための手段として使われるということである。

ただ、動詞部分が先行詞の特定のための弁別的な仕組みとして機能していなくても、特定の語が先行詞として優先的に選択される場合がある。

- (7) HTMLによって表現されるページには文字ばかりでなく、画像や動画音なども貼り付けることが可能である。このようなページをWebページと呼ぶ。HTMLをGUIで簡単に作成するツールも多い。

(宮川公男(編)大塚秀治(著)2004『経営情報システム』中央経済社)

(7)の下線部の「HTML」を「それ」に書き換えると、その先行詞は「Webページ」と解釈するのが自然になる。

- (8) HTMLによって表現されるページには文字ばかりでなく、画像や動画音なども貼り付けることが可能である。このようなページをWebページと呼ぶ。それをGUIで簡単に作成するツールも多い。 (用例7の改変)

「HTML」も「Webページ」も、「作成する」ことが可能な点で「それ」の指す候補となり得るが、直前に登場する「Webページ」の方が、「それ」に距離的に近いため、候補として選択されやすくなると考えられる。これらの点から、以下のような代入規則を設定できる。

- (c) 先行詞の候補が複数あれば、次の条件のいずれかに当てはまるものを代入せよ

条件1. 「それ」の係り先の動詞に合う名詞句

条件2. 「それ」から距離の近い名詞句

3-1-3. 語の情報価値の差に関わる規則

前節に加えて、本節では、先行詞の候補になり得る名詞句同士の情報価値の差から先行詞が特定される場合を取り上げる。テキスト中において使用された名詞句は、テキストの情報構造の中で種々の情報的重要性を担い、それが「それ」の先行詞の特定に利用されることがある。例として次のようなケースを考える。

(9) したがって、オーケストラは、舞台から離れた場所で音楽をやり、観客は衛星中継でそれを観るという趣向。百七カ国に同時中継するというのだから、文字どおりのスペース・オペラと言っている。オペラは、いわば現代の恐竜である。それを博物館入りさせずに、メディアの世界でひと暴れさせよう、という企画だろう。それをローマでやる。いかにもイタリア人好みのパフォーマンスだ。
(五木寛之2002『スペインの墓標』東京書籍)

一回目の「それ」は、「オーケストラ」を指し、二回目の「それ」は、「オペラ」を指す。この点についての曖昧性はほぼ無いと考えられる。しかし、三回目の「それ」は、おそらく「企画」を指すと捉えるのが正解であろうが、「オペラ」と取ることも可能であり、曖昧性が生じている。

一回目と二回目の「それ」に関しては、その直前の文脈において有標の「は」によってマークされた語が選ばれている。一般に、「は」によってマークされた語はその文脈内において主題性を持つとされ、主格を始めとした格助詞によってマークされたものに対して優位な情報価値を持つとされる(亀山2004、砂川2005)。したがって、名詞句の重要度に関する格差が生じるために、複数ある「それ」の先行詞の候補が一つに定まるのだと考えられる。

この規則は、初期状態、すなわち「それ」に何も代入されていない状態において、複数の名詞句から一つを決定する条件として認めることができる。これにより、規則(c)に以下のような条件を加えることができる。

[条件3. 「は」によってマークされた主題となる名詞句を代入せよ]

用例(9)では、二回目の「それ」の時点で、条件3の「は」によってマークされた語は「オーケストラ」と「オペラ」の二語であるが、より近い位置に登場するという条件2にも当てはまる「オペラ」が、優先的に先行詞として選ばれる。

その他、以下のような定型表現においても、先行文脈における候補の多寡に拘らず、明確に一つの名詞句が選定される。

(10) ようこそ! ハムスター王国へ!! 緑につつまれた平和で豊かな島国、それ

がハムスター王国です。

(グラスウインド編2002『ルームメートはハムスター』日本文芸社)

(10)の「それ」が「島国」を指すことは明白である。つまり、「名詞句＋読点＋「それ」を先頭に置く文」という定型表現においては、「それ」は読点の直前の名詞句を値として代入することが分かる。

[条件4.〈名詞句＋読点＋「それ」を先頭に置く文〉という定型表現の名詞句にあたる名詞句を代入せよ]

条件4の成立は、この定型表現における名詞句が読点による休止を伴い有標化し、高い情報価値を持つことで、続く「それ」が主題相当となった名詞句の「言い換え」を意味できる構造となることに起因していると考えられる。

以上の考察から、前節における規則(c)を次のように書き換える。

(c')先行詞の候補が複数ならば、次の条件のいずれかに当てはまるものを代入せよ

条件1.「それ」の係り先の動詞に合う名詞句

条件2.「それ」から距離の近い名詞句

条件3.「は」によってマークされた主題となる名詞句

条件4.〈名詞句＋読点＋「それ」を先頭に置く文〉という定型表現の名詞句にあたる名詞句

3-1-4. 規則(c')における条件間の優先順位

規則(c')には複数の条件が設定されたが、これらは必ずしも相反する条件ではないため、それぞれの条件が同時に出現した場合にどれが優先的に選択されるかという点が大きな問題となる。そこで本節では、規則(c')の条件間における優先順位を把握するための考察を行う。

まず(c')における条件1は、少なくとも構文上の制約がない条件2や3に対して優先される条件であると考えられる。なぜなら、「それ」の係り先の動詞に適合しない語は、たとえ距離が近くても、また主題相当の情報価値を持っていても、意味の整合性を保つために「それ」の値として選ぶことができないからである。

問題なのは、条件1と条件4の差と、条件2から4における優先順位の差である。そこでまず、条件2と条件3のみが同時に現れた場合に、その優先度にどのような違いが生じるかを見る。今、先に挙げた用例(9)の一部を以下のように書き換えてみる。

(11) オペラは、いわば現代の恐竜である。しかも、それはメディアの世界的企画だ。それをローマでやる。いかにもイタリア人好みのパフォーマンスだ。

(用例9の改変)

(11)を見る限り、「それ」の先行詞が「オペラ」を指すと取ることも「企画」を指すと取ることも可能であり、曖昧性が強い。この時点でどちらを選択するか明確に選べないことから、両者の優位性に明確な違いはないと言える。したがって、条件2と条件3のみが条件として同時に現れた場合、先行詞は確定不能になると考えられる。

次に条件4であるが、次の用例(12)を用いて、優先度を条件3と比較する。

(12) 有給休暇の計画付与(労基法第39条5項)は、その事業場の過半数を組織する労働組合、それがない場合には労働者の過半数を代表する者との協定により、有給休暇の5日を超える部分について、協定で定める時季に与えることができるという制度です。

(小宮山敏郎2005『すぐに使える労働法便利事典－労働時間、休日・休暇、賃金、退職・解雇などで困ったらこの1冊！－』こう書房)

(12)では、「有給休暇の計画付与」という、条件3に当てはまる主題性のある名詞句が登場しているが、「それ」が指すのは明らかに直前の「労働組合」である³。これにより、条件4が、条件3の主題性に対して優先的であることが分かる。

また、条件4は直前の名詞句を取るという点で、そもそも条件2を含有する。そのため、選択の際の優先順位は条件4を上に見積もることができる。

最後に条件1と条件4についてであるが、両構文を成立させて、かつ両者の指定する先行詞が異なるようにするためには、次のようにせざるを得ない。

(13) 有給休暇は、事業場の過半数を組織する労働組合、それが取れる日数について意見することができる労働者を代表する者との協定により、有給休暇の5日を超える部分について、協定で定める時季に与えることができる。

(用例12の改変)

(13)では、「それ」は「取る」という動詞の取り得る名詞との関係により、すなわち規則(c')の条件1の適用により「有給休暇」を指す。同時に、形態上は、[名詞句+読点+X]という言い換え構造が成り立つが、Xの「それ」は「労働組合」を指定することができない。結果として、「それ」は連体修飾節の語として機能し、[名詞句+読点]によって宣言される言い換え先はそれより後ろの「労働者を代表する者」という名詞句を取るか、あるいは言い換えが起こらず「労働組合または労働者を代表する者」という並列

構造を取るかのどちらかとなる。

つまり、条件1と条件4においては条件1が優先され、条件4の定型表現は条件1の適用に合わせて構文上・意味上の位置づけを変更しなければならない。以上から、規則(c')は次のように書き換えられる。条件番号もここで変更する。

(c'') 先行詞の候補が複数ならば、一つに定まるまで次の条件を番号順に実行せよ。ただし条件3abのみが同時に出たときは確定不能とみなす

1. 「それ」の係り先の動詞に合う名詞句を代入
2. 〈名詞句＋読点＋「それ」を先頭に置く文〉という定型表現の名詞句にあたる名詞句を代入
- 3a. 「それ」から距離の近い名詞句を代入
- 3b. 「は」によってマークされた主題となる名詞句を代入

本稿では、ここまでで明らかになった規則(a)(b)(c'')を、「それ」への先行詞代入の際の初期状態における代入規則とする。次節では、以上により先行詞が「それ」の値として代入された後の、種々の条件について考察を行う。

3-2. 代入された値の維持と変更に関する規則について

3-2-1. 「それ」の値の維持

本節以降では、一度先行詞が代入された「それ」が、どのような条件下でその状態を維持・変更するのかを分析していく。本節では、先行詞を明確に特定できる同一名詞の反復を取り上げ、それを「それ」によって言い換えた際に先行詞が元の語を適切に言い表せているのかどうかをテストすることで、規則を探る。はじめに、以下の用例を考察に利用する。

- (14) ① どれほど需要があっても供給することができなければ実現しない。② 要望に沿ってモノを作ることは難しい。作ることができる範囲で満足してもらい以外にない。③ その意味では 需要1 があり、それを満足させるだけの供給力がある場合だけ 需要2 と 供給1 が合致し経済が成り立っていく。④ 経済1 の規模が大きくなるためには 需要3 が大きくなるとともに 供給2 もまた大きくなる必要がある。⑤ 潜在的な 需要4 は無限と言ってもよいであろう。⑥ 人間のあくなき欲望を反映するからである。⑦ これに対し 供給3 は有限である。⑧ 単なる空想で物を作ることはできず、サービスを提供することもできない。

(水谷研治1994『縮小均衡』革命』東洋経済新報社;文および反復した語に付した番号と下線類は筆者による)

(14)は、八つの文によって構成されている。このうち、反復的に使用され、指示語を用いた際に先行詞を明示的に持ち得る表現は、「需要」「供給」「経済」の三語である。また、「それ」という指示語が三文目で使われており、これは明らかに直前の「需要」を指している。ここで、三文目に登場する「需要2」と「供給1」を取り上げてみると、「需要2」を「それ」と言い換えることは可能だが、「供給1」を「それ」と言い換えることはできない。

(15)その意味では需要があり、それを満足させるだけの供給力がある場合だけ |需要／それと供給が合致し経済が成り立っていく。

(16)その意味では需要があり、それを満足させるだけの供給力がある場合だけ 需要と |供給／#それが合致し経済が成り立っていく。

(15)と(16)では、既に「それ」が波線部「それ」が下線部「需要」を意味する語として使われているため、少なくとも言い換えを行った時点における「それ」という語も、「需要」の意味でしか使えない。つまり、「それ」に何らかの具体的な値が代入された場合、その状態は次の「それ」の使用にも基本的に引き継がれることが分かる。

(d)「それ」の値として代入された先行詞は基本的に変更されない

3-2-2. 「それ」の値のキャンセル

では、別な名詞句を「それ」の値として代入するためには、どのような規則が必要となるのであろうか。ここで用例(14)の四文目に注目すると、元のテキストの状態であれば「需要3」は「それ」に言い換えられないが、「需要2」を「それ」に言い換えれば、「需要3」も「それ」に言い換えることが可能になる。

(17)その意味では需要があり、それを満足させるだけの供給力がある場合だけ 需要と供給が合致し経済が成り立っていく。経済の規模が大きくなるためには |需要／#それが大きくなるとともに供給もまた大きくなる必要がある。

(18)その意味では需要があり、それを満足させるだけの供給力がある場合だけ それと供給が合致し経済が成り立っていく。経済の規模が大きくなるためには |需要／それが大きくなるとともに供給もまた大きくなる必要がある。

(17)の二文目の「需要」は、「それ」に言い換えると「経済の規模」を指すことになってしまう。しかし、(18)の二文目の「需要」の言い換えであれば、適切に同一対象を指

し示すことができる。

つまり、(17)の二文目「需要」の言い換えとして「それ」が使えないのは、「それ」の値として代入されていたはずの「需要」という語が、その後で明示的表現として改めて使われてしまったためであると考えられる。ここから、「それ」の用法として、代入された値は以下のような規則を課されると言える。

(e) 代入された先行詞が改めて明示された場合、「それ」の値はキャンセルされる
キャンセルされた「それ」は初期状態に戻り、規則(a)(b)(c')に従って再度代入を行うことができる。

3-2-3. 「それ」の値の変更に際した代入規則と維持規則の衝突

規則(e)による値のキャンセル無しに、異なった先行詞を指す「それ」を連続的に使うと、代入規則と維持規則の衝突による曖昧性が生じる。

(19) まず、切ったトマトを用意する。それを器に盛った後、ドレッシングをかける。それは冷えていればいるほど良い。(作例)

(19)における二文目の「それ」は明らかに「トマト」を指す。その後、「トマト」が明示的に示されていないため、四文目の「それ」も引き続き(厳密には先行文脈の情報を引き継いだ)「トマト」とすることが可能である。しかし、実際には、二回目の「それ」は「ドレッシング」を指すことも可能である。

これについては、二回目の「それ」の直前に「ドレッシング」という語があり、両者の距離が近く代入が容易であることが原因として考えられる。つまり、規則(c')の中の[「それ」から距離の近い名詞句]という条件が、規則(d)に影響を与えていると言える。規則(c')は代入規則であるが、以上から、代入規則は初期状態で働くのみならず、常に維持規則に対して変更の力を加えようとしていることが分かる。初期状態ではその力に対する抵抗がないため、規則(c')を始めとした代入規則がそのまま適用できるが、「それ」に何らかの値が代入された状態では、代入規則は維持規則である規則(d)と衝突し、先行詞の選定に曖昧性を生じさせることになる。これは規則ではないものの、以下のようにまとめることができる。

(f) 規則(e)が適用されない場合、先行詞の変更には代入規則と規則(d)の衝突による曖昧性が生じる

ただ、『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ2009年度版』で検索した限りでは、用例(19)と同様の例は見られなかった⁴。つまり、こうした表現は、そ

の生成に際して規則同士の衝突による曖昧性の発生という負担が課された処理のため、現実にはほとんど使用されないものであると考えられる。

4. まとめ

本稿では、文脈指示用法において名詞句を受ける「それ」に代入すべき値として先行詞が特定されるまでの照応プロセスに関する諸規則の記述を試みた。その結果、名詞句を受ける「それ」によって行われる照応プロセスが、次のような規則によって制限されていることを明らかにした。

○代入規則

- (a)「それ」によって表現される文の意味と矛盾しない情報が付与された名詞句を代入せよ
- (b)先行詞の候補が一つであれば、その名詞句を代入せよ
- (c')先行詞の候補が複数ならば、一つに定まるまで次の条件を番号順に実行せよ。ただし条件3abのみが同時に出了ときは確定不能とみなす
 - 1.「それ」の係り先の動詞に合う名詞句を代入
 - 2.〈名詞句+読点+「それ」を先頭に置く文〉という定型表現の名詞句にあたる名詞句を代入
 - 3a.「それ」から距離の近い名詞句を代入
 - 3b.「は」によってマークされた主題となる名詞句を代入

○維持規則

- (d)「それ」の値として代入された先行詞は基本的に変更されない
- (e)代入された先行詞が改めて明示された場合、「それ」の値はキャンセルされる

○代入規則と維持規則の関係

- (f)規則(e)が適用されない場合、先行詞の変更には代入規則と規則(d)との衝突による曖昧性が生じる

これらの規則における問題として、規則(c')における条件3abの扱いと、代入規則と維持規則の関係を記述した(f)の扱いが挙げられる。どちらも、曖昧性の発生によって先行詞が確定不能になるという結論を導き出すものであるが、実際にテキストにそのような状態が現れた場合、衝突している二つの規則・条件の程度差を利用して、何らかの先行詞を当てはめることになるであろう。その際の力関係は、定量的な

分析による把握が求められると言え、そうした分析を通すことで、照応プロセスの規則をより詳細に記述することが可能になると思われる。

また、本稿で対象とした名詞句を先行詞として取る「それ」のみならず、文相当の表現を受ける「それ」や指示代名詞「これ」、指示形容詞としての「その」「この」といった表現をも視野に入れて規則の拡張や汎用性の検討を行うことで、指示詞が先行詞を特定するまでの照応プロセスについて、その全体像を把握できるようになると考えられる。以上の点は今後の課題としたい。

注

¹ 本稿では、適切な先行詞の選定を行えない状態を「#」によって記述する。「#」は庵(2007)においてテキストレベルの不適合性としての「非結束性」を表すのに用いられ、統語的な非文法性を表す「*」と区別されている。本稿で検討する不適切性も、統語的というよりはテキストレベルでの不適合性に当たると考え、「#」を選択した。

² 用例としては以下のようなものもあり、あるいはこれがこの原則に対する反例に見えるかもしれない。

次に湿地を加えて炒め、火が通ったところで塩と胡椒、それに濃口醤油少量で調味、仕上げにシェリー酒を振りかけ、最後にパセリの微塵切りを加えて手早く混ぜるとできあがり。

この用例では、「それ」の指す先行詞は「塩と胡椒」であり、「塩」と「胡椒」の二語を含んでいるように見える。しかし、この「それ」が指すのは「塩」と「胡椒」という別個の語ではなく、「塩と胡椒」というひとまとまりであると考えられる。

³ なお、その前に登場する「その(事業所)」は、「ある(事業所)」と同一の意味であり、本稿で取り上げている先行詞が代入される指示詞とは性質が異なる。

⁴ 検索は、検索対象「それ」に対して後文脈に「それ」を含むことを指定し、前後文脈の抽出文字数を200文字に設定するという条件の下で行った。なお、この条件による検索の結果では、指す対象が異なる「それ」の連続的使用そのものは見られたが、その場合、基本的に使われた「それ」の一方または両方がそれ以前の事態を指しており、異なった名詞句をそれぞれが指すという事例ではなかった。

参考文献

- 庵功雄(1995)「ソノNとソレ - 指示代名詞の分解可能性 -」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版, pp. 632-637
- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 亀山恵(2004)「談話分析: 整合性と結束性」田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘『言語の科学7 談話と文脈』岩波書店, pp. 92-121
- 金水敏・田窪行則(編)(1992)『指示詞』ひつじ書房
- 田窪行則(2010)『日本語の構造 - 推論と知識管理 -』くろしお出版
- 東郷雄二(2000)「談話モデルと日本語のコ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7, pp. 27-46
- 佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点 - 日本語の談話における主題展開機能の研究 -』くろしお出版
- 竹田完次(2000)「文章中の文脈を指示するソレとコレについて - 実際の言語資料において -」『計量国語学』22, 4, pp. 129-146
- 堤良一(2001)「文脈指示における「ソノ」「ソレ」-「テキストの意味」の量から見た一考察-」『KLS』21, pp. 216-225
- 堤良一(2002)「文脈指示における指代詞の使い分けについて」『言語研究』122, pp. 45-78
- 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書店

用例出典

国立国語研究所(2009)『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ2009年度版』